

## 認定社会福祉士制度におけるスーパーバイザーの実態と課題

### －「スーパーバイザー実態調査」より－

○ 立命館大学 岡田 まり (001740)

片岡 靖子 (久留米大学・003183)、野村 豊子 (日本福祉大学大学院・004514)

潮谷 恵美 (十文字学園女子大学・002079)、潮谷 有 二 (長崎純心大学・002675)

キーワード：スーパービジョン、スーパーバイザー、認定社会福祉士

### 1. 研究目的

ソーシャルワーク・スーパービジョンは、専門性の向上とサービスの質の担保のために重要である。欧米ではスーパービジョンを実施することで有益な実践結果が増え、有害な結果が減少することが実証的に示されている<sup>(1)</sup>。わが国でも認定社会福祉士制度において認定および更新のためにスーパービジョンは不可欠とされている。しかし、その実施状況は、認定社会福祉士誕生後4年たっても不明のままである。そのため本研究は、調査を通してスーパービジョンの実態と課題を明かにすることを目的とする。それにより、スーパービジョンの普及と充実に向けて具体的に取り組みことが可能になる。

### 2. 研究の視点および方法

認定社会福祉士制度におけるスーパーバイザーの実態を明らかにするために、認定社会福祉士認証・認定機構に2017年8月時点でスーパーバイザーとして登録されていた493名を対象に自記式質問紙を用いた郵送調査を実施した。調査期間は、2018年8月から10月までである。調査項目は、基礎属性、スーパービジョンを行った実績とその自己評価、スーパービジョンを受けた経験、ソーシャルワーク業務についてスーパービジョンを行う自己効力感、研修についてである。分析は統計ソフト SPSS を用いて行った。

### 3. 倫理的配慮

本研究は、本学会の研究倫理指針に基づき、また立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。調査票の送付は認定社会福祉士認証・認定機構（以下、同機構）に委託したが、本調査は同機構とは独立した調査であり、調査票への回答は自由で、協力を辞退しても不利益を被ることはないこと、調査票は無記名で個人が特定されることはないことなど倫理的配慮を調査協力の依頼状に明記した。

### 4. 研究結果

質問紙を送付した493名のうち218名より返答があり、回収率は44.22%だった。回答者の平均年齢は52.46歳（標準偏差8.41）、ソーシャルワーク実務経験は平均19.62年

(標準偏差 8.53) だった。年齢の割に実務経験が少ないのは、回答者のうち 56 名が教育機関所属のためと推測できる。回答者のうちスーパーバイザー経験があるのは 157 名 (72%)、過去 5 年間にスーパービジョンに関する研修を受講したのが 196 名 (89.9%)、またスーパービジョンに関する研修の受講を希望するのは 194 名 (89%) だった。スーパービジョンに関する相談や助言ができる人が身近にいる人は 141 名 (64.7%) だった。

認定社会福祉士制度でのスーパービジョンについて依頼または相談を受けたことがあるのは、回答者のうち 145 名 (66.5%) だが、実際にスーパービジョンを行ったことがあるのは 116 名 (53.2%) だった。これまで契約したスーパーバイザーの数は、1 人が 46 名 (21.1%)、2 人が 26 名 (11.9%)、3 人が 23 人 (10.6%) だった。スーパーバイザーが同職場だったのは 3 人だけである。職場外でのスーパービジョンの謝礼は 0 円から 60000 円に分布していたが、最頻値は 5000 円の 32 名 (14.7%) であった。自分自身が行ったスーパービジョンについての評価は、「よくできた」または「まあまあできた」が 58 名、「まったくできなかった」または「あまりできなかった」は 55 名でほぼ半分に分かれている。

認定社会福祉士制度において実務経験目標となっている各項目について、スーパービジョンを行う自信 (自己効力感) がどの程度あるか、1「自信なし (できないと思う)」～5「自信がある (できると思う)」の 5 段階で尋ねたところ、個別レベル (19 項目) の平均点は 3.77、組織レベル (17 項目) では平均 3.55、地域レベル (17 項目) では平均 3.15 だった。また、最頻値も、個別レベルでは 95% の項目で 4 だが、組織レベルでは 65% が 4、地域レベルでは 12% のみ 4 となっていた。つまり、自信がないわけではないが、地域レベルについてのスーパービジョンを行う自己効力感が低いことが明らかになった。

## 5. 考察

認定社会福祉士制度のスーパービジョンを行ったことがあるのは、回答者のほぼ半数であり、そのほとんどで担当したのは 1～3 人のスーパーバイザーだけである。「スーパーバイザーがいない」という声をよく聞くが、バイザーとバイザーのマッチングやバイザーのスーパービジョンを受ける動機付け等、詳細を調べる必要性が示唆された。自らが行ったスーパービジョンについての自己評価は分かれており、組織レベル、特に地域レベルについてのスーパービジョンの自己効力感を向上させることが今後の課題であることが明らかになった。

本研究にご協力いただいた方々に心より感謝致します。本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究 (B) 平成 27 年度～平成 30 年度「社会福祉士のスーパーバイザー養成プログラムの開発と評価」課題番号 15H03440 (代表：岡田まり) の成果の一部である。

文献 (1) Barak, M.E.M., Travis, D.J., & Pyun, H. (2009). The impact of supervision on worker outcomes: A meta-analysis. *Social Service Review*, 83(1), 3-32.